

## イスラエルの遺跡調査 ② 初期シナゴグの建築遺構、発見！

天理大学文学部教授  
桑原 久男 Hisao Kuwabara

### 歴史が積み重なるテル・レヘシュ遺跡

天理大学を中心とする日本隊が発掘調査を行っているテル・レヘシュ遺跡は、南北約 350m、東西約 150m の不整形な卵形をしていて、「上の町」と「下の町」の二段構えになっている。遺跡の居住史は 3,000 年を越え、前期青銅器時代（紀元前 3200 年頃）、中期青銅器時代、後期青銅器時代、鉄器時代、ローマ時代と、さまざまな時代の建築遺構が累々と積み重なっている（写真 1）。遺跡に刻まれているのは、まさに、この土地の複雑で独特な歴史そのものだと言ってよい。



写真1 発掘調査中のテル・レヘシュ遺跡

遺跡が所在するのは、現代国家としてのイスラエルの領域だが、古代まで歴史を遡ると、エジプトやメソポタミアの両文明の周縁にあって、絶えず、隣接する大国に翻弄され、争いが繰り返されてきた地域だ。後期青銅器時代には、地中海世界の国際的なネットワークの一端に位置しながらも、地域内の各都市国家はエジプトの強い政治的影響を受ける。エーゲ海の都市国家が崩壊するなど、地中海世界全体が「暗黒時代」に陥る鉄器時代初頭（紀元前 11 世紀頃）には、混乱の中からイスラエル人が歴史の中に登場し、在地のカナン人や「海の民」の一派とされるペリシテ人と抗争を繰り返して、やがて、イスラエル、ユダ、アラムなどの王国が並び立つ。しかし、これらの小国は、やがて、アッシリア、バビロニアなど、隣接する大国に蹂躪され、続いて新興のペルシアの支配を受けることになる。ヘレニズム時代になると、今度は地中海の側からギリシアの文化が押し寄せて地域全体を席卷し、ローマ時代にはローマの属州となることを余儀なくされる。さらに、ユダヤ戦争の後、ついに離散の運命を辿ることになったユダヤ人集団は、しかし、逆境のなかで宗教を鍛え、一神教を通して独自のアイデンティティを確立し、聖書を残すなど、その後の人類史に多大な貢献をおこなった。

### 今年度の調査課題と予期せぬ発見

テル・レヘシュ遺跡の最頂部には、約 80m 四方の平坦な区域（アクロポリス）が認められ、後期青銅器時代から鉄器時代の建築遺構の上に重なって、後期鉄器時代に大型複合建築が築かれ、さらに、ローマ時代には小さな村落が営まれている。これまでの調査でわかってきたのは、後期鉄器時代の大型複合建築が 6～7 世紀に営まれた要塞的な建物で、バビロニアやペルシアの支配の実態を明らかにする貴重な資料だということだ。またローマ時代の村落については、ユダヤ教の清浄規定を守るために手を洗うときに用いられた石灰岩製の容器の破片が多数見ついていることから、住み着いていたのがユダヤ人の小さなコミュニティだということも突き止められた。ここ数年、発掘調査の課題になっているのは、これら、各時代の建築遺構の構造と性格をさらに明らかにし、年代をより具体的に特定することだ。

アクロポリスの南端近くの調査区では、プラスターを塗って

白く化粧した階段状の遺構が一昨年の調査で見つかっていて、果たしてこれがローマ時代のものなのか、それとも後期鉄器時代のものなのか、両方の可能性があり、昨年の調査でも明確な結論が得られないままになっていた。階段状の遺構がローマ時代のものだとすれば、身体や器物を清く保つために必要な「ミクヴェ」と関連する可能性があり、さらには、近辺に、シナゴグが存在することも想定される。逆に後期鉄器時代のものだとすれば、大型複合建築の中心的な広間への入り口といった性格が考えられる。しかしながら、この調査区の近辺は、樹木があり、国立公園局から伐採を禁止されているために残念ながらこれ以上の調査が難しい。

こうした状況を踏まえ、今期の調査では階段状遺構の周辺部の調査は断念し、ローマ時代の建築遺構については、保存状態が良好なアクロポリスの北半に調査区を設け、現地の考古学者モチィ・アヴィアム博士が調査を担当することになった。一方、後期鉄器時代の大型複合建築については、これまで、ローマ時代の建築が広がっていないアクロポリス南半の東側の区域を中心に発掘調査を進めてきたが、今年度は、西側の区域にも新たに調査区を設定することにした。ローマ時代の建築遺構がよく残る場所では、逆に、それ以前の時代の遺構がすでに破壊されていることが明らかなので、慎重に調査地点を選定する必要があるのだ。地表の観察からはローマ時代の建築遺構が重なっていないと考えられ、さらに、事前に行った地中レーダー探査で大型複合建築の石壁を捉えたと見られる明確な反応が見られたため、安心して、その場所に調査区を設定することにした。

調査を進めると、想定どおり、後期鉄器時代の立派な石組みの壁が姿を現したのだが、意外な発見がそれに付け加わることになった。鉄器時代の石壁と別に、地表のすぐ近くにローマ時代の石組みの壁があり、その壁に沿って長方形に加工した切石が並べられていることがわかってきたのだ。こうした構造は、マグダラなど、ガリラヤ地方を含む他の遺跡で見ついているシナゴグに見られる特徴と一致している！ 調査期間は限られている。ローマ時代の建築遺構を調べるためのアクロポリス北側の調査区は直ちに閉鎖し、シナゴグと見られる建築遺構の構造を探る調査に集中しなければならない。急遽、作戦を立て直し、発見された石組の壁の方向に合わせて調査区を北側に広げることになり、現地のワーカー主力の短期決戦であったが、ついに、シナゴグと見られる建物の西半分の構造が明らかになった（写真 2）。



写真2 発見された初期シナゴグ跡

第 2 次ユダヤ戦争以前の紀元 1 世紀に遡る初期シナゴグの建築遺構は、類例が数少なく、テル・レヘシュで見つかったこの建築遺構は、地域史を考える上でも、広く宗教史を紐解くうえでも、新たな知見を付け加える極めて重要な発見だ。